

後継者に作品発表の機会を



木工

吉田木芸 吉田 宏介

「あれはうれしかった」と、今でもつくづく思い出される事がある。

「後継者」に関しては、何かと苦勞の多い「伝統工芸」の世界で、息子の仕事が高く評価された時である。

後継者として働き始めた長男が、仕事の傍ら出品していた県美展に、連続入選するようになった。それならばと、全国規模の伝統工芸展に出品を促した。入選を目標に、幾度かの挑戦。入選と選外、中央のレベルの高さと自らの技術の差、苦惱と工夫が積み重なった何回目かの発表の日。夢にも思わぬ「入賞」しかも、上位入賞の電話連絡が入ったのである。当然の事ながら、私も出品しているし、突然の知らせに興奮し、一瞬、わが事かと思いい、電話の向うと会話がかみ合わなかった事が思い出される。

この時の長男の作品は、素空（すもく）の樺材で筐体を作り、側面と天面に連続した丸溝を刻んで波を表現し、木画象嵌（もくがぞうがん）を施した大振りな飾り箱で、銘木と

伝統にこだわらない創意が大きく評価された。

公募展に入選し、作品が展示され、多くの人々の目に触れるというのは、特にPR活動をしていない我々にとっては、認知を促す良い機会でもあり、同時に、技術向上への動機づけにもなるのである。

木工芸は、長い年月をかけ、手技を磨き「もの」を学ぶといわれて来たが、今の世の中、そう悠長な事も言っていられない。機械の導入は不可欠であるし、新たな技法や素材の応用も「伝統」の一部として取り入れるべきである。昔ながらの「膠」（にかわ）に魅力を感じつつ、合成樹脂系接着剤の接着強度、耐久性を利用しない手は無いいし、棕（むく）の葉や木賊（とくさ）で研いだ木肌、勝るとも劣らぬ仕上がりを見せる研磨紙は、作業の効率という点でも有効である。

「古来の物を古来のままに造る事」を踏まえつつ「より良い物を造る、良い方法を常に考える」のが、今の世で伝統工芸を指向する者

の務めであると思うし、先人の努力も、実は「その時代での最新技術」を指向するものであったはずなのだ。

長男が、比較的短期間で、ある程度の成果を挙げたのも、このような考えがあったからかもしれない。

工業デザインを学んで培われた感性か、単に「若い」という事か、一時、装飾過多とも思えるような意匠を続けた事もあったが、それは「伝統の粹」の中で堂々巡りをするようなものであった。やがて、その混沌から何かを学んだのか、私のように銘木には拘らず、平凡な材に、削りや、透かし彫りを施し、その他さまざま加工を加えるようになり、作風も確実に変わって来ているようである。

こういった息子の作品と、以前にも増して銘木にこだわっている私の作品とが同じ会場に並び「父子展」は、その対比もあってか、来場者の方々も興味をそそられるようだ。

そして、きまって讃辞が集まるのは、息子の方である。それもまたうれしく思われるも



ので、どうしても似てくる作風を意識して避けようとする苦勞が、こういう時に報われているのだらうと、親としても同じく報われ、また、心むむ時でもある。

木工芸は、多種多様の道具、治具を使う。さまざまな鋸(のこぎり)と、何十丁もの鉋(かんな)を取りそろえ、「これぞ手技の仕事場」というような写真を見ると、私も懐かしく昔を思い出すが、不思議な気分にもなる。今、作業台の側には機械場があり、道具は硬木用、軟木用各三丁程度の鉋。際鉋(きわがんな)等、最小限の特殊な鉋。絞り込んだ鉋類だが、

豆鉋だけは例外で、仕上げる物の形に合わせ、その都度作っているので、どんどん増えている。そして、鑿(のみ)類と小刀。鋸は一品物から安価な替え刃式まで。また、近所の鉄工所からもらう、鉄鋼用の超硬刃物の破片も重宝な切削道具となるのだ。万事自己流の道具立てと作業である。

「生涯現役」が目標である。無理な作業や力に頼った仕事を改善していく努力も大切だと思っている。

「黒柿」という銘木をご存知だろうか。来歴を正倉院の御物にまでさかのぼる事のできる銘木である。その色相、品格、手触りと刃通りの良さに限りない魅力を感じ、こだわっている材である。かつて、針箱、鏡台、火鉢、茶箆筒(ちゃだんす)等々、さまざまな家具調度として、方々の家に在ったものだが、現在、産出量が激減し、超のつく高級材となつてからは、新たな製品は少なくなっている。

前記のような材料確保の問題と、後継者不足に悩まされているようである。

私は、個展や、春と秋の伝統工芸展にあたって、黒柿の作品を造るよう心掛けていたが、それは単に、美材、希少材だからというばかりではなく、仕事の活性化にもつなげたいと考えているからである。

幸い、黒柿には先代からかわつて来ているので、遠くは岩手、青森方面との付き合いもあり、今は原野となつている廃村から出た「など」という黒柿を少しずつだが求める事ができる状況である。しかし、その代金は、決して安くはない。時に暮らしを圧迫するものがあるが、それでもイザとなれば求めずにおれないし、その上、長い間の乾燥、管理の間などコスト的にも大変な思いをしながらの黒柿との付き合いなのだ、今ある材料を大切に使いつつ、黒柿の文化をも伝えて行きたいと思っている。

原木そのものも、新品種に比べて果実の食味も劣つていたのだから、枯渇と植え換えられ、枯渇寸前の状態である。

鶴岡が、黒柿細工の特産地として知られて久しいが、

吉田 宏介

昭和11年天童市生まれ

桐箱製造業の傍ら創作活動に入り、昭和57年、山形県総合美術展工芸部門に入選。以後、伝統工芸新作展、日本伝統工芸展、日本工芸会木竹部会展等に入選、入賞。平成2年に個展、平成5年には親子展を開いた。

日本工芸会正会員、日本工芸会東日本支部会員。